交野古文化同好会

新　春　初　歩　き

平成26年1月2日

宮之阪駅～御殿山駅

行程・宮之阪駅→①禁野車塚古墳→②百済王神社→③百済寺跡→④中宮平和ロード→⑤枚方製造所土塁跡→⑥大阪美術学校跡→⑦御殿山神社→（⑧渚の院跡）→御殿山駅

（散策時間９時～正午）

①禁野車塚古墳

全長120メートルと北河内屈指の大きさを誇る国史跡の前方後円墳。邪馬台国の女王・卑弥呼（ひみこ）の墓との説がある箸墓古墳（はしはかこふん、奈良県桜井市）と形がよく似ており、箸墓古墳と同時代の３世紀末～４世紀初頭に造られた可能性が出てきました。少なくとも４世紀前半にはさかのぼるとされます。

禁野車塚古墳は、天野川に臨む段丘に位置しており、被葬者は淀川と天野川の合流地点を掌握し、かつ箸墓古墳の被葬者とも関係の深い人物であると考えられています。禁野車塚古墳は、現在、史跡公園として整備されています。

②百済王神社

百済国王、義慈王の王子・禅広（ぜんこう）（＝善広）は、新羅・唐連合軍によって祖国が滅亡した際、日本に亡命してきました。やがて朝廷に仕えることとなり、百済王氏（くだらのこにきし）という姓を賜り、難波の地に居住していました。

その後、陸奥守として赴任していた禅広の曾孫にあたる百済王敬福（きょうふく）は、聖武天皇の東大寺大仏鋳造に際し、陸奥国で産出した金を献上し、その功により、従三位河内守に任ぜられ、中宮の地を賜り、氏寺として百済寺、氏神として百済王神社を造営し、一族ともどもこの地に住みついたと考えられています。

その後、度重なる火災により百済寺の壮大な伽藍は灰燼に帰し衰退しました。

やがて神社の再興が図られ、今ある本殿は、文政10年（１８２８）に奈良春日大社から移築した「春日移し」です。なお、拝殿にかかる「百済国王　牛頭天王」の木版額は、当社が百済王氏の祖霊を祀る神社であることを明らかにしています。

祭神・百済国王・牛頭天王（ごずてんのう）

本殿は春日造。

拝殿の扁額

③百済寺跡

百済寺跡は、百済最後の国王、第１３代義慈王の後裔（こうえい）、百済王氏が８世紀中頃に建立した氏寺の

跡。５代孫の百済王敬福が氏寺として百済寺を創建して一族の繁栄の基礎を築いたとされています。

百済寺の造営された地「**交野**」は、桓武天皇が延暦４年（７８５）に日本で始めて天壇を築き効祀（こうし）をおこないました。まさに「天地交わる」処に相応しい名前といえます。

平安時代初期には天皇や皇族が鷹狩りなどの遊猟を楽しんだところとして著名です。

百済王氏は、桓武・嵯峨朝には両天皇の交野行幸の折にはここを舞台に饗応を重ね一族の昇進にあずかるとともに外戚としての地位を高めました。特に桓武天皇は生母、高野新笠が百済の武寧王の子孫であったことから百済王氏を［朕が外戚］として特に優遇しました。百済寺跡は、百済王氏の本拠地を交野に移して以降の盛衰を象徴する遺跡といえます。

また、伽藍配置は双塔式の伽藍配置で統一新羅時代の影響が見られ、渡来系氏族の氏寺に相応した伽藍形式と言いえます。

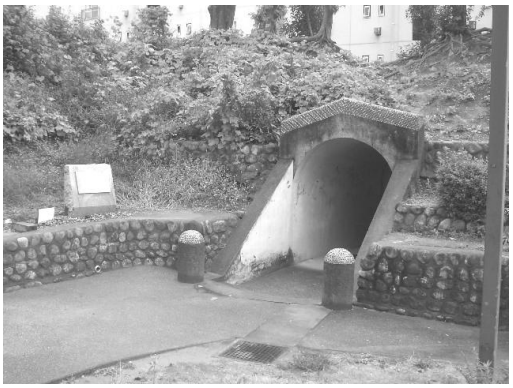
なお、1952 年には古代史に於ける日朝文化の交流の史実を徴証する遺跡であると特別史跡に指定されました。(特別史跡は府下では大阪城)

④中宮平和ロード

戦前には津田駅から禁野火薬庫と枚方製造所まで、軍用鉄道（現国道307 号）が敷かれ、毎日大量の火薬や砲弾などが戦地に向けて積み出されていました。1991（平成3）年に、この軍用鉄道敷の一部であった中宮本町から中宮西之町までの約600 メートルを「中宮平和ロード」として整備しました。ここでは、昔の鉄道敷をしのばせるSL 形のトンネルや線路沿いに立てられていた軍用電柱等を保存・設置しています。

⑤枚方製造所土塁

旧陸軍禁野火薬庫が大爆発を起こしたのは、1939（昭和 14）年 3 月 1 日。天地を揺るがす爆発が約 4 時間、29 回にわたって繰り返され、死傷者約 700 人、全半壊した家屋約 821 戸に及ぶ大惨事となりました。



枚方製造所・禁野火薬庫ともに火薬を収蔵した倉庫は、爆発しても被害が拡大しないように、倉庫の屋根の高さまで達する堅牢な土塁で 1 棟ずつ囲まれていました。1945（昭和２０）年の終戦により軍施設は閉鎖され、以後周辺開発に伴い土塁や建物・施設等は取り除かれましたが、高陵小学校の南側には禁野火薬庫の土塁が、また、東側の校門付近や中宮第三団地内には枚方製造所の土塁が残り、戦争の生き証人となっています。

⑥大阪美術学校跡

大阪美術学校校舎

大阪市内にあった大阪美術学校が御殿山神社の隣にやってきたのは昭和４年。文化によるまちおこしを考えた当時の牧野村が、校長で南画家の矢野橋村に誘致を持ち掛け、京阪電鉄などから土地４８００坪の無償貸与を受けるなどして実現したものです。同年５月には生徒の通学用として御殿山駅も開設しました。駅から坂を上り、石段を上ると正面にモダンな洋館校舎、右手には１５０畳敷きの広さを誇る日本建築の美術館・大来館がありました。

日本画家の福岡青嵐や洋画家の斉藤与里など一流の講師から、多い時は300人が学びました。

昭和14年３月１日、旧陸軍禁野火薬庫の大爆発で学校は半壊。半年後に再開されましたが、戦況が悪化した昭和19 年に校舎は軍に接収され学校は事実上閉鎖されました。

そして、40年以上を経た昭和62年「御殿山に再び文化施設を」という地元の声を受け、美術学校跡地に御殿山美術センター(図書館併設)が誕生しました。

(枚方市のホームページ参照)

☆交野市と関わりのある同校出身画家。
清水要樹氏　南画家。

１９０９（明治４２）年11 月 11 日三重県に生まれる。１９３０年大阪美術学校に学び矢野橋村に師事。

１９３３年第 14 回帝展に初入選。１９４５年第５回日展[霊峰大峰]で入選しその後 も入選を重ねるが１９６０年日本南画院に参加。各地の山を踏破し画を描く。

１９９２年日本南画院第 32 回展で内閣総理大臣賞を受賞、１９９７年米寿記念回顧展を開催。また、日本南画院副会長を務め、後進の育成に尽力する。１９９９年交野市群津の自宅で歿。享年 90 歳であった。

なお、同氏の作品は青年の家の展示室でも見ることができる。(毎月第２土曜・第４日曜)

⑦御殿山神社

祭神は品陀和気尊(ほむだわけのみこと) (応神天皇:八幡大神)

御殿山神社は、元は渚の院跡の観音寺境内に設けられていた小倉の粟倉神社のお旅所であった。江戸文政年間（１８１８～２９年)、渚村に産土神勧請の話が起こり、お旅所に八幡大神を勧請して西粟倉神社と称した。明治初年の神仏分離令によって、１８６９年(明治２)御殿山に社殿を造営し、翌年当地に遷宮し、御殿山神社と改称し、現在に至っています。

御殿山の名は、惟喬親王の渚院のあずまやに起源すると伝わるが、江戸初期に領主永井伊賀守がこの山に陣屋を設けたところから、呼ばれるようになったとも言われる。

美術センターの建設に先立ち１９８６年の発掘調査で弥生時代やから平安時代にかけての住居跡・建物跡などが見つかりました。また、江戸時代の建物跡など陣屋に関する遺構も見つかっています。

⑧渚の院跡

平安時代、枚方一帯は交野ケ原といわれ、皇族・貴族が鷹狩りや花見に訪れる場所で、文徳天皇の第一皇子・惟喬親王（これたかしんのう）の別荘・渚院がありました。

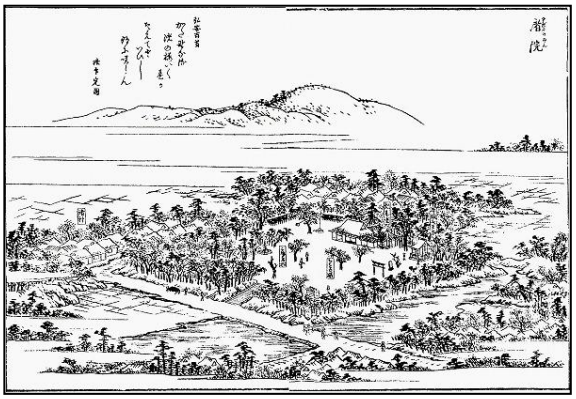
平安歌人在原業平(ありわらのなりひら)が渚院の桜を見て詠んだ歌、

「世の中に　たえて桜の　なかりせば
春の心は　のどけからまし」

（世の中にもし桜がなかったら、春の人の心はのんびりするであろうに）は、『伊勢物語』や『古今和歌集』にも収められ、桜の花のはかなさを詠んだ名歌として親しまれてきました。

また、皇位継承争いに敗れた惟喬親王の心情を込めたとも解釈できます。◎惟喬親王は、紀静子を母とする文徳天皇第一皇子です。藤原明子を母とする第四皇子の惟仁親王が、三人の兄を越えて、清和天皇として即位します。藤原氏の権勢下で皇嗣への道を絶たれた惟喬親王は、在原業平や紀有常など近縁の腹心との交遊によって憂悶（ゆうもん）を慰めます。そしてついに、出家して京都の「小野の里」に隠棲（いんせい）します。

河内名所図会・惟喬親王交野が原遊猟図



河内名所図会・渚院

渚院の跡地には、江戸時代に観音寺が建てられたといわれています。観音寺は明治時代の初めに廃寺となり、現在は梵鐘と鐘楼（ともに市指定有形文化財）が残るのみです。なお、梵鐘は田中家が寛政８（1796）年に鋳造したもので、河内国惣官鋳物師（かわちのくにそうかんいもじ）である同家の活動を示す貴重な文化財です。なお枚方市藤阪には、市立旧田中家鋳物資料館があります。

メモ